

「ごあんない

高砂 八段之舞 肥後の国阿蘇の宮の神主友成一行は、都への途上、播磨の国高砂の浦に着く。そこへ老夫婦が現れ、松の木蔭を清める。友成が松の謂れを尋ねると、尉は摂津の国住吉の者、姥は当所の者と言ひ、互に通う心遣いがあるが、夫婦の道は遠くないと説く。そして高砂住吉の相生の松の謂れと、古今東西の松のめでたさを語る。やがて自分達はその相生の松の精であること

友成は所の者を召して相生の松の謂れを更に聞き、彼の舟に乗せてもらって住吉に着くと、住吉明神が現れ、舞楽を奏し舞を舞い、世の安寧を寿ぐ。世阿弥作の神能で、前段は相生の松から夫婦相合、即ち子孫繁栄を寿ぐのであるが、「古今集」仮名序を引いて、和歌の世界観の上にそれを成立させている。また後段は、例えば天女や龍神などが登場して賑やかに舞台を彩る風流能とは異り、シテ一人が登場して舞を舞い、世阿弥の志向した、シテにすべてを集約してゆく密度の高い様式美が実現されている。

今回は「八段之舞」の小書で、前段では青竹で結い廻した相生の松の作り物が正先に出され、松の神性を具体的に見せる。また後シテは「神体」や「三日月」など、目に金具の入った強い表情の面を掛け、緩急の激しい特殊な「神舞」を舞う。囃子の技巧の面白さも是非お楽しみいただきたい。

田村 替装束 東国方の僧が都に上る。頃は春。花の都は文字通りの花の盛り。清水寺に参り地主の桜を愛でていると、花守とも言うべき宮守の童子が現れ、桜の木蔭を掃き清める。僧の問いに答えて清水寺の縁起を語り、見え渡る名所を教えていると、音羽山に月が昇る。童子は月に輝く桜の下でこの美しい情景を礼賛し、観音の誓願のありがたさを説く。そして我が行く方を見よと言ひ残して田村堂に消える。

清水門前の人から清水寺の縁起と田村磨のことを聞いた僧が、夜もすがら法華経を唱えて待つと、夢中に田村磨が現れ、勅命を受けて鈴鹿に赴き、鬼神を平らげた有様を語り、清水の観音の仏力を賞賛する。

禪竹の作と考えられる軍体の祝言曲である。主題にも曲趣にも修羅能の要素は無く、神能に近い。まず前段の美的感覚は秀逸である。満開の花の下に佇む美童。まさに幽玄である。日影に輝く花は、やがて月影に映る。美の光景は絵画的な世界になり、時間が止まる感覚を生み出す。童子と僧は声を合わせて「春宵一刻値千金、花に清香月に陰」と感嘆する。一時ぞと見ゆる景色かな「今この時かや」と、「とき」という言葉がキーワードとなっているが、散る花の美しさや、無常の中を生きぬく命の輝きに裏付けられる「とき」を感じることが出来る。また後段は観音信仰に支えられており、鈴鹿の鬼退治は、中央政権の地方への進出という次元でなく、万民の平安を祈る崇高な次元にまで高められているように思われる。

「替装束」の小書では、前シテは喝食をかけることが多い。水衣は有り無し「の両様。後シテは黒頭に唐冠、天神の類の面を掛け、狩衣を着て剣を背負い、唐団扇を持つことが多い。いかにも古代の英雄らしい姿になる。

羽衣 彩色之伝 駿河の国三保の松原の漁師白龍は、春の朝風に早々に漁を止め、松原に舟を戻した。雨上りの松原は、この世とも思えぬ景色になっている。天より花が降り、音楽が聞こえ、芳香に満ちていたのである。これはただ事ではないと思つて、松の枝に止める者が掛かっている。家宝にすべく取つて帰ろうとするが、背後より呼び止める者がいる。「それは天人の羽衣であり、たやすく人間に与えられるものではない」と。天人の羽衣と知った白龍は、国の宝にしようと思ひ、返そうとしない。飛行の道を通つた天人は、天に憧れ悲嘆にくれる。白龍はさすがに哀れに思ひ、天人の舞を見ることを条件に羽衣を返す。天人は喜び羽衣を纏い、月世界の舞を舞い、数々の宝を降らせ

各地に伝わる羽衣伝説の多くは、天人と人間の交りを描いているが、能の「羽衣」は月世界の清浄を描くことに終始する。まず天人が登場する場面では、既に極楽のような美しい光景が用意されている。また天人と白龍の間答において、人間誰もが持っているであろう物欲や俗性の対比によって、天人の純粋無垢な美しさを神性が強調される。そして羽衣を纏つての天人の舞は、まさに天上世界を地上に映し、幽玄無上の美的世界を具現する。終曲部に満ち溢れる祝言性は神能と同じく、祝言の展開としての幽玄を感じることが出来る。

「彩色之伝」では「クリ」「サシ」「ケセ」を無くしてすぐ「盤渉(高い調子)序之舞」になり、月世界の清浄感を強調する。また常は「破之舞」の部分が「彩色」に変わり、静謐に位高く、天人は月と同化してゆく。天冠には白蓮を戴き、天人が大勢上の化現であることを示す菩薩形で立出つ。

乱置壺 双之舞 中国揚子江の畔、揚子の里に住む孝行者の高風は、ある夜不思議な夢を見た。揚子の市に出て酒を売れば富貴の身となるという夢だつた。彼が酒を売ると、夢の通りになった。また不思議なことがあつた。高風が市で酒を売る度にやがて来て酒を飲む者がいて、いくら盆を重ねても顔色ひとつ変えず帰つてゆく。その名を尋ねると、海中に棲む狸々だと言ふ。高風は秋の月の夜、酒壺を据え置いて狸々を待つっていると、狸々が現れ、いつものように酒を飲み、友の狸々を呼び、二人共々舞を舞う。そして汝めども尽きせぬ泉の酒壺を高風に与える。高風の家は末永く栄えていった。

狸々は酒の妖精のような架空の生き物で、能では「狸々」という専用面をかけた、赤頭、赤地着付、緋大口(「乱」では半切)、赤地唐織壺折と、赤ずくめで立出つ。秋の夜、月の下、風が渡れば、酒の妖精が現れる条件は整う。凡そ酒は洋の東西を問わず、文明のあるところに生じて文化を進め、人の感性を豊かにして詩を生み出す。「松虫」と同様、白楽天の詩的世界を踏まえて酒友の友愛を描いているが、永遠の繁栄を祈る祝言曲であるところが「狸々」の大きな特徴と言えよう。

「乱」とは「狸々」の小書であるが、これを曲名として書き上げることが多い。今回は「置壺」「双之舞」の小書も付き、正先に大きな酒壺が据えられ、二人の狸々が登場する。常は「中之舞」のところ「乱」という特殊な舞に変わる。波のような緩急のある囃子に乗り、波の上を歩くような足遣いをし、波間に浮き沈み、流れ流れて舞い戯れる。能の中でも特に音楽性と舞踊性の高い演出である。

(河村晴道)

文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)



第六十回 京都観世能 第一日目

平成30年10月21日(日) 午前11時始(10時開場)

京都観世会館(京都市左京区岡崎円勝寺町44)

主催 公益社団法人京都観世会

お問合せ先 京都観世会館 TEL. 075-771-6114 URL: http://www.kyoto-kanze.jp

++++ 入場券 9月1日発売開始 +++++

S席(1階正面指定席) 12,000円 A席(1階脇正面中正面指定席) 10,000円
B席(一般2階自由席) 6,000円 学生(2階自由席のみ) 3,500円

- ◆上演中のお出入りはお遠慮ください。
◆事務局で許可した方以外の写真撮影・録音・録画は固くお断りします。
◆上演中は携帯電話の呼び出し音を切り、スマートフォンなどの画面が光らないようにご注意ください。
◆予告なく出演者その他が変更になる場合もございますので、予めご了承ください。

【表紙写真】「乱」 撮影 上杉遥

京都観世会館アクセス



◆京都観世会館へは
JR京都駅から
市バス[5][100]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約30分)
地下鉄[丸]烏丸御池にて地下鉄東西線乗り換え「東山駅」下車(乗車時間約20分)
阪急河原町駅から
市バス[31][46][201][202][203][206]で「東山(仁王門)下車」(乗車時間約15分)
京阪三条駅から
市バス[5]で「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車(乗車時間約7分)
地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約1分)
JR三条駅から
地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約8分)
山科・醍醐方面から
地下鉄東西線で「東山駅」下車(乗車時間約9~17分)
地下鉄東西線「東山駅」から
徒歩約5分
◆会館東隣に有料駐車場(約20台)がございます。

京都観世会館六十周年記念
第六十回 京都観世能【第一日目】

平成三十年十月二十一日(日) 午前十一時始

後見・地謡

姥河村 和貴
住吉明神 河村 晴道 從者 小林 努
阿蘇宮神子成原 大 谷口 正壽 前川 光範
八段之舞 從者 有松 遼一 曾和 鼓堂 左鴻 泰弘
問 高砂ノ浦人 茂山忠三郎

(後見) 河村 晴久
青木 道喜

(地謡) 樹下 千慧 吉浪 壽晃
大江 泰正 吉田 潔司
橋本 忠樹 井上 裕久
浅井 通昭 浦田 保親

(休憩二十分)

(仕舞)
実盛キリ 橋本擴三郎
野宮 大江又三郎
玉之段 片山九郎右衛門

(地謡) 大江 広祐
青木 道喜
橋本 磯道
橋本 光史

(二時十分頃)

田村 宗一郎 從僧 松本 義昭 石井 保彦
童下田村廣 旅僧 江崎欽次朗 林 吉兵衛 杉 市和
替裝束 從僧 和田 英基
問 清水前ノ者 茂山 逸平

(後見) 味方 玄
小林 慶三

(地謡) 浦田 親良 田茂井廣道
河村 和晃 古橋 正邦
梅田 嘉宏 河村 和重
吉田 篤史 河村 博重

鬼瓦 (狂言)
大名 茂山 千作 太郎冠者 茂山 茂

(後見) 山下 守之

(休憩十五分)

羽衣 (仕舞)
天人 浦田 保浩 漁夫 是川 正彦 白坂 信行 前川 光長
彩色之伝 漁夫白龍 福王 知登 大倉源次郎 杉 市和
漁夫 喜多 雅人

(後見) 深野新次郎
杉浦 豊彦

(地謡) 樹下 千慧 大江 信行
河村浩太郎 橋本 雅夫
宮本 茂樹 大江又三郎
松野 浩行 越賀 隆之

(仕舞)
高野物狂 青木 道喜
三輪 河村 晴久
船弁慶キリ 古橋 正邦

(地謡) 大江 泰正
吉浪 壽晃
浦部 好弘
浅井 通昭

乱 (狂言)
狸々 味方 團
狸々 分林 道治
置壺 高風 岡 充
双之舞 河村 大 井上 敬介
吉阪 一郎 森田 保美

(後見) 橋本 光史
片山九郎右衛門

(地謡) 浦田 親良 浦部 幸裕
大江 広祐 橋本擴三郎
河村 和貴 武田 邦弘
深野 貴彦 片山 伸吾

(終了予定 五時過)